

私の出会った丸山眞男―戦後日本の座標軸―

武田 清子

丸山眞男は戦後日本の一つの「座標軸」ともいうべき存在だったと思う。私は、終戦直後より「思想の科学」や「平和問題談話会」、その他を通して親しく接し、いろいろと学問的、思想的影響を受け、また、暖かい友情をもって導いていただく機会を多く与えられてきた。オックスフォード大学のセント・アントニーズ・カレッジ（リチャード・ストーリー氏ら）につながる仲間でもあった。さらに、国際基督教大学（ICU）で幾度か行ってきた講演、「思想史について―類型・範囲・対象―」、「原型・古層・執拗低音―日本思想史方法論について私の歩み―」、その他は、丸山さんが世に残された記念すべきメッセージともなった。

超越的・普遍的価値

丸山さんが戦後の日本にとって一つの重要な「座標軸」であった意味は、伝統思想を分析し、日本人が人類的価値に向って自らを開き、真に民主化する道を提示することだったと思う。

丸山眞男は特定の宗教の信者ではなかった。しかし、常に人間的・社会的現実を超えた「超越的、普遍的絶対者」、あるいは「絶対なるもの」を重視する視点に立って、それと日本の伝統的文化・思想とを切り結ばせて考えようとする立場が顕著だったと言えるように私は考える。

「超越的、普遍的なるもの」についての丸山さんのとらえ方を幾つか拾い上げてみよう。「宗教的な超越者にも、自然的な普遍者にもなじみにくい日本文化」と言い、そこにおいて、「歴史が歴史形成に参加する人格の決定の積み重ねとしてつくり出されるのではなくて無窮の連続性が永遠者の位置を占める」とか、「普遍的文化に参与すること、それは、自分の内にある普遍を追求することだ」等々の発言がある。

戦後、丸山さんが世の注目を受ける契機となった論文「超国家主義の論理と心理」（一九四六年）の中でも、先ず、「法」は抽象的一般者として、治者も被治者も共に制約するものだ」という言葉に示されて

いるように、治める者をも、治められる者をも共に拘束するものが「法」なのだということを設定している。それは、「自然法」をそのうしろに持ち、さらに、その背景には「永遠法」が考えられる法概念だといえると思う。これと対照して、敗戦までの日本の場合は、「国体」から流れ出てくる絶対的価値としての「国法」、それが、私たち個人の私的內面までをも支配してきたことを問題として、超国家主義のイデオロギーの鋭い分析がなされている。

一九七二年に出版された『歴史思想集』（筑摩書房）の中で、記紀神話の冒頭の叙述から抽出した発想様式をかりに歴史意識の「古層」とよび、日本における歴史の出来事へのアプローチの基底に響き続ける執拗な持続低音があることを指摘する一方、この本の別冊に加藤周一さんとの対談で次のように述べている。「日本のように超越者の意識の薄いところでは、ぼくの頭から離れなかった問題は、歴史をこえた何ものかへの帰依なしに、個人が周囲の動向に抗して立ち続けられるだろうか」ということだと。そして、鎌倉仏教が日本歴史に対する超越的世界観のくさびを打ちこませた最初にして最後のものだというような話し合いのあと、丸山さんは次のようにも言っている。「一般常識的な意味で、歴史というのは、現世の出来事の時間的な変化を追ってゆくということでしょう。ところが、超越的な世界観が出てくると、この世における人間の営みを絶対的な立場から審判する。それに対して、人間はどう永劫の責任を負うかということが大きな関心事になる」とも語っている。

こうした関連から、普遍的絶対者にコミットした思想家として、親鸞、道元、伊藤仁斎、徂徠、福沢、内村などを挙げている。東大での講義録でも、ICUでも。(もつとも、宗教的な普遍的絶対者の問題としては、あえて私見を述べれば、内村、親鸞、道元の場合と、伊藤仁斎、徂徠、福沢の場合とは次元に相違があるように思えるが)。それはそれとして、丸山さんは、さらに続けて、「反日本的として、しばしば攻撃された人々から、凡百の日本主義者よりも、もっとオリジナルな思想と学問が生れた」と語っている。

南原先生への応答

キリスト教に関しては、無教会の創始者・内村鑑三の弟子であった南原繁先生の影響もあつたと考えられる。内村鑑三のものもよく読んでおられたように思う。「内村は『人類とは隣の八さんや熊さんのことだ。これが普遍ということだ』といった」というようなことは、ICUでも語られたし、東大でも語られたようである。御自分がヨーロッパ思想を研究したいと考えていた時、南原先生から「日本あるいは中国の思想をやれ」と言われた。その時、南原先生は、「我々はヨーロッパ思想をやっているが、それはヨーロッパだけの思想と思っているのではない。その内にある普遍的・人類的なものを問題にしてきたつもりだ。しかし、今の時代にそんな考えは通用しない」と言われた。日本の思想、東洋の思想を普遍的・人類的問題意識でやれと言われたのだと丸山さんは受け止めたのである。日本精神を主張する軍部や右翼と同じ土俵で相撲をとるために日本や東洋の思想をちゃんと学問的に

やるが必要なのだ」と受けとめて学問研究に取組んで行った丸山さんの南原先生との人間的、学問的關係は、興味深く、かつ、重要だと思う。

次に、「自己超越の発想」ということに関してふれると、『近代日本思想史講座』（筑摩書房、一九六〇年）が計画された時、その中に「発想の諸様式」という巻を設けることとなった。その編集会議の中で、「自己超越の発想」の項を私に分担して書くようにと提案されたのは丸山さんであった。その後、私が考えた案は、次のようなものであった。

- (1) 「物」による自己超越—(a)偶像崇拜 (b)宗教的国家観 (c)唯物史観
- (2) 「人」による自己超越—(a)諦観—①西行における美的・宗教的自然観 ②福沢諭吉におけるケシ粒の人間観の無執着 ③夏目漱石の「則天去私」 ④森鷗外の諦念—傍観者の意識 (b)合理主義・ヒューマニズム—自律的な自己が普遍性を内在させていること、自己を自らの客体としうる超越的自律性
- (3) 「神」による自己超越—(a)キリスト教信仰 (b)天の概念—内村鑑三の解釈するような西郷隆盛における陽明学の天概念 (c)親鸞の悪人正機の信仰、道元の信仰など。

私はこの案を丸山さんにお見せしてご意見をうかがった。大体ご賛成下さったのであるが、ただその時、唯物史観をどこへ入れるか、「物」による「人」に入れるか、「人」による「人」に入れるかに私は迷っていた。どちらとおっしゃるかなというのも一つの関心であった。「それは『物』

によるでいいんじゃないですか」と言われ、私の考えも決った。丸山さんは学生時代からマルキシズムにも関心を持ち、多く読んでおられたようだし、共感される点もあったようであるが、基本的には、常にいわれたように、「私は学生時代以来、新カント派だった」と言っておられたことを、ここでも感じとったことであった。

神なき人間の荒涼

文学に関しては、ドストエフスキーを愛読されたということも浮かがっていたので、私は東京女子大学図書館の渡辺敏一氏にお願いして、丸山文庫の中の『罪と罰』、『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』などにある書き込みや傍線の引かれた部分を見せていただいた。その中に、「神なき人間の自由の荒涼たる世界」、「目的なき意志—神を見失った自我」という書き込みがあった。また、強く傍線を引いておられるところに、「完全な無神論者は、完全な信仰に達する、最後の一つ手前の段に立っている」というような箇所があった。これは、求道者の立場ともとれるように思える。私共キリスト者は、「我信ず。信仰なき我を救いたまえ」と常に祈りつつある者である。「自分は本当のキリスト者であるだろうか」という畏れを持つ存在であり、「最後の一つ手前の段に立っている」のだと思う。そういう意味で、常に求道者であるともいえる。そうした姿勢において丸山さんと共通な心情にある存在のような気がする。

丸山さんは、「普遍的・超越的絶対者」、あるいは、「絶対なるもの」にいつも心を向け、南原先生と同様に、哲学的にはカントに深い関心

を持ち、文学においては、これだけでは勿論ないが、ドストエフスキーが『罪と罰』、『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』などにおいて提起する無神論から信仰に至る求道者の視点に関心を持っておられたのではないかと、そうした心の姿が覗き見られるように私には思える。

座標軸のメッセージ

以上のような「超越的・普遍的絶対なるもの」への関心を縦軸とするなら、それと、横軸としての日本の伝統思想・社会関係とを切り結ばせて、私共日本人に、個人として、また、集団としての自己を、その実態を凝視させ、自らの内包する問題を考えさせる「戦後日本の座標軸」としての役割を果たされたのではないかと考えさせられる。

こうした二本の線の切り結ぶ十字路に立つ視点で日本文化、日本の思想を分析される諸論文から、方法概念としてのキー・ワードというか、幾つもの名言が生み出されたように思える。例えば、徂徠研究における「自然」と「作為」、福沢論における「判断の相対化による自己超越」、「鎖国」と「開国」、「閉じた社会」と「開かれた社会」、「ササラ型」と「タコツボ型」等々。

丸山眞男という思想家が提示したこうした座標軸、そこに内包された英智こそ、彼が残した貴重なメッセージではないかと考えさせられる。

丸山さんの蔵書、手稿類のすべてを引きとり、整理し、丸山研究の拠点を作って下さっている東京女子大学に深く感謝する。

● 講師プロフィール ●

ただだ・きよこ。国際基督教大学名誉教授、元世界教会協議会会長。近代日本思想家。本名・長清子。

〔『東京女子大学学报』五六六号、二〇〇二年一月号所収。なお本講演を元にした同名の論稿が、『世界』二〇〇二年八月号に掲載されている〕

